

論文の和文要旨

論文題名

現代中国の市場経済と「良き母親」言説の再編
—都市部で働く「80 後」の高学歴女性を中心に

氏名

朴紅蓮

本研究では中国都市部で働く^{パーリンホウ}「80 後」の高学歴女性に焦点を当てて、市場経済期に再編されつつある「良き母親(好媽媽)」言説の根本には、社会主義市場経済と家父長制の相互作用と変容がある点を明らかにした。

市場経済期の中国では女性を取り巻く労働環境が厳しくなり、母親の育児責任と負担が加重化している。また、性別役割分業意識もますます強化されつつある。では、なぜ市場経済期にこのような現象が起きているのか。本研究では、この問いに答えるためにジェンダーの視点とマルクス主義フェミニズムの理論を使って、市場経済の下での新たな家父長制と、「良き母親」言説の再編過程について、マクロ、メゾ、ミクロレベルから分析した。

本研究では文献調査、統計データ分析、インタビュー調査の研究方法を使用した。統計データは主に政府公表のデータを使い、フィールドワークの対象地域は中国の天津市である。

序章ではまず、本研究の問題意識を提起し、性別役割分業、母親と育児、「80 後」に関する先行研究を検討した。次に、マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性について考察した。

第1部では、計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場経済期に「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化しつつある点についてマクロレベルから考察した。

第1章では、統計データを用いて、労働力率・就業率、雇用形態、性別賃金格差、職業構造という側面から市場経済期に中国女性の労働環境が厳しくなった点、また、市場経済期に女性の育児負担が加重化した点を明らかにした。

第2章では、国家の政策に関する分析を通じて計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場化の中で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変容しつつある点、市場化の中で企業社会は男性労働力を中心にジェンダー化され、女性は労働市場から家庭へプッシュされている点を明らかにした。

第3章では、市場化の中で女性はなぜより家庭へと移行するのかを、国家の育児および子どもの教育関連の政策を通じて考察した。市場化の中で育児が家庭へと私事化し、国家は「一人っ子政策」と素質教育を通じて質の高い人材を育成しようとするが、子どもの質への要求の高まりは結局母親の育児責任と負担を加重化した。

第2部では、天津市に焦点を当てて、天津市の婦女連合会(以下では「婦女連」とする)の「母親教育プロジェクト」というメゾレベル、女性個人というマイクロレベルから「良き母親」言説がどのように再編され、女性個人がその再編とどのようなかかわりを持つかを分析した。

第4章では、「母親教育プロジェクト」に関する分析を通して、婦女連が提唱する「良き母親」とは自己犠牲的で社会奉仕的な、仕事・子どもの教育・他の家庭のことをすべて上手く行う「スーパーマザー」型の母親である点を明らかにした。

第5章では、専業ママに焦点を当てて、「80後」の母親たちが「良き母親」言説をどのように受け入れているのかを考察した。「80後」の母親たちが考えている「良き母親」とは子どものために自分ができるすべてを行う、自己犠牲的で辛抱強い母親である。心身とも優秀な子どもを育てるために母乳育児を行い、早期教育を熱心に行うことから、母親たちが「良き母親」言説を内面化し、その再編に積極的に参加していることが分かる。しかし、専業ママになれる者は経済的、人的資源に恵まれている一部の者に限られている。

第6章では、天津で働く「80後」の高学歴女性とその夫へのインタビュー調査を通じて、「良き母親」言説の根底に家父長制がある点を考察した。母親たちは「小さな店の夢」を持っているが、それは子どもおよび家族のために母親が仕事を調整することである。夫(父親)ではなく、母親が仕事を調整する根底には育児を女性の責任とし、女性に家庭内の無償労働を担わせる家父長制がある。

終章では各章の内容をまとめ、本研究の意義と今後の課題を明らかにした。

このような内容を持つ本研究には以下のような意義がある。

第一に、本研究ではマルクス主義フェミニズム理論を現在の中国社会に応用して、社会主義市場経済と家父長制の、市場経済期における新たな関係を明らかにした。その分析において本研究が着目したのは無償労働の担い手の変化である。中国では社会主義婦人解放論が支持され、マルクス主義フェミニズム理論を参考にすべきだという指摘はあるが、本格的な研究はほぼない状況である。そこに育児という無償労働をなぜ女性が多く担うようになったのかに焦点を当てて、社会主義市場経済と家父長制の相互関係を分析したことに本研究の意義があるとも言える。

計画経済期に中国では社会主義化の中で家庭内の無償労働の一部を社会化し、国家は女性の社会進出、つまり女性の労働力化を促進した。女性の仕事と家庭への国家の支援は女性の二重負担を緩和すると同時に無償労働を女性の責任として定着させた。計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業は市場—計画経済と家族—家父長制が妥協した結果であった。では、市場化の中で市場—市場経済と家族—家父長制、また国家はどのような新たな関係を構築したのか。市場経済期に市場は自分が選好する男性労働力を獲得し、また質が高い労働力を獲得できる点で、家父長制は女性を家庭へプルして無償労働を担わせている点で、国家は育児という福祉負担から脱出した点で、市場と家父長制と国家は自らに「得」な部分を獲得している。

第二に、本研究では「良き母親」言説の再編について、育児の私事化、「一人っ子政策」、素質教育など国家の政策というマクロレベル、婦女連の「母親教育プロジェクト」を取り上げてメゾレベル、女性個人というミクロレベルで分析した。「良き母親」言説で最も大きな問題点は妊娠・出産・哺乳を女性だけが持つ「自然的な性質」とし、その母性を女性の「本質」とする本質主義に基づいている点である。このような本質主義的な母性を核心とする「良き母親」言説は母性イデオロギーであり、その根本には家父長制がある。このように既存の研究と異なって、本研究はマクロ、メゾ、ミクロという三つのレベルから「良き母親」言説の再編について全般的にとらえ、「良き母親」言説が家父長制に基づく本質主義的な母性イデオロギーである点を明らかにした。

第三に、本研究では専業ママを「自発的専業ママ」と「非自発的専業ママ」にわけて定義し、なぜ「80 後」の母親たちが専業ママになるかについて明らかにした。ここでいう「自発的専業ママ」とは有能なキャリアウーマンであったが、子どものために退職し、夫は高収入で、子どもの世話と教育に専念する母親である。その一方、「非自発的専業マ

マ」とは子どもの世話をする者がいないため、やむを得ず退職し、子どもの世話や家事を自ら行う母親である。「80 後」の母親たちが専業ママになる最も重要な理由は心身とも優秀な子どもを育てることで、その背景には「良き母親」言説がある。

本研究は以上のような意義をもっているが、以下のような課題もある。

第一に、本研究では高学歴女性、その中でも育児期の女性を対象とし、男性については「夫」という立場からしか論じることができなかった。「80 後」の高学歴女性は中流階層に属している者である。市場化の中で格差がますます拡大している現在の中国で女性内部の多様性と格差に関するより詳細な分析が必要であると思う。

第二に、本研究で取り上げている国家や女性組織、母親個人以外に、医者や教育家などのいわゆる専門家も「良き母親」言説の再編に参加している。「良き母親」言説におけるこのような専門家というアクターの役割とその影響は、国家や女性組織、母親個人というアクターの役割・影響と共通する部分と異なる部分があると思われる。しかし、本研究では育児サイト「天津ママネット」の分析において専門家の存在について言及しているが、踏み込んだ分析までには至らなかった。

以上のような課題を残しているが、市場化にともない「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と性別役割分業が変容しつつある中で、「良き母親」言説が再編・利用されている点を明らかにしたことに本研究の最大の意義があると思われる。